

てんまがき 禮次郎 7 歳の書「天満書」

—若槻禮次郎コレクション—

学問と習字（手習い）の神様である菅原道真（天神、菅公）を祀る白瀧天満宮では、毎年7月25日と26日に例大祭「天神祭」を催します。この祭礼では、天神様にあやかって習字が上達するようお願いを込めて、境内に子どもたちが書いた手習いの書「天満書（「大文字」とも言う）」が掲示されます。

松江市雑賀町出身で、総理大臣となる若槻禮次郎も少年時代に寺子屋で書きあらわした書を白瀧天満宮に掲示したのです。禮次郎はその時に書いた書「萬物生光輝」を記念に大切に保存し、今に残しました。

本展では7月25日に行われる天神祭に合わせ、7歳の若槻禮次郎が白瀧天満宮に掲示した天満書を紹介します。

禮次郎 7 歳の書「萬物生光輝」

左端の書は、伸びやかな大きな字で「万物光輝を生ず」と読む。出典は中国古典詩の一つである楽府をまとめた『樂府集』卷三十の「長歌行」からで、「(温かい春を迎えて、)ありとあらゆるものは命の輝きを自ら放つ」という意味である。

書が入っていた蓋の裏には、大正8年(1919)8月31日に若槻禮次郎自らこの書を記念に保存すると記す。

松江の風俗に毎年6月の白瀧天満宮の祭日に際し、城下の寺子屋が境内に競って仮屋を構え、門下生の書いた書を多くの人々に披露する。いわゆる「大文字」とはこのことである。私は七歳の時に松本宗四郎先生に書を学び、この書を大文字とした。

禮次郎は明治5年(1872)から翌年4月に小学校へ入学するまで、雑賀町の松本宗四郎塾に通い習字を学んでいた。7歳の書から禮次郎が幼年期から学習していたことや、松江城下の習俗を知ることができる。

一行書「萬物生光輝」(若槻禮次郎 筆/若槻家所蔵)



蓋の裏書(禮次郎書)



わかつき せいじろう
若槻 禮次郎 (1866~1949)

松江藩の足軽であった奥村仙三郎おくむらせんさぶろうの次男として、松江の雑賀町さいかまちで生まれる。叔父である若槻敬けいの養子となり、敬の娘の徳子とくこと結婚して若槻家を継ぐ。

若くから苦学し、敬の援助を受けて上京、帝国大学（東京大学）仏法科を首席で卒業。大蔵省へ入庁し、大蔵次官を務めたのちに政治家へと転身する。

総理大臣を二回拝命、大正 15 年（1926）1 月に第一次、昭和 6 年（1931）4 月に第二次若槻内閣を組閣した。その後は昭和天皇を輔弼する重臣の一人として、一貫して平和主義を貫いた。

平成 30 年（2018）に若槻家より松江市に禮次郎の遺品等を寄贈、寄託され、松江歴史館の若槻禮次郎コレクションとして折々公開している。



境内にずらっと並んだ天満書てんまがき

6 月 25 日（※）の大礼祭に際し、多くの人々で賑わう白潟天満宮を描く。天満宮の境内に設置された青と白の仮屋の下には、天満書（大文字）と思われる縦長の書が掛けられ、それを参拝客が眺めている。（※江戸時代は旧暦で齋行、現在は新暦 7 月 25 日に齋行）

この絵図は、松江の絵師である清水撫玉しみずぶぎよくが安政年間（1854～1859）に描いた三幅対の掛軸の左幅である。松江大橋南詰から白潟天満宮までを描き、商店だけではなく臨時の屋台が建ち並んでおり白潟の町の活況さを表現している。

白潟天満宮祭礼図 部分（白潟天満宮所蔵）



禮次郎が通った松本塾

松本宗四郎塾は嘉永 6 年（1853）雑賀町に開塾し、習字や読書を教えた寺子屋である。明治 6 年（1873）4 月に雑賀南小学が開校すると、宗四郎は習字の教師として採用されている。

看板から塾の休日が月に二日間であったことがわかる。

松本宗四郎塾の看板（館蔵）